表　　現

90

栃木県立宇都宮高等学校　文芸部

栃木県立宇都宮高等学校文芸部誌

表現 第９０号

目次

テーマ制作
「地名×お菓子」 P3〜33

自由制作 P34〜47

あとがき P48〜53

テーマ制作
「地名×お菓子」

① 鬼無里　悠夜
（宇都宮×ドーナツ）
P４～１３

② 汐織　郷馬
（新大阪×赤福）
P１４～１８

③ 片桐　修
（中野×ケーキ）
P１９～２０

④ 坂巻　蝸牛
（沖縄×ちんすこう）
P２１～２３

⑤ 天頂バス
（岩手×かもめの玉子）
P２３

⑥ ０６
（京都×パフェ）
P２４～２６

⑦ 村島　康平
（矢板×和菓子）
P２７～３３

甘いお菓子に想い耽る

鬼無里　悠夜

「寝癖はなし、リボンもずれていない、カラーコンタクトも付けた、外出用の服にも埃一つついていない、お気に入りのスカートにも皺一つついていない、もしもの時のためにこの前買い揃えた勝負下着もしっかり彼の好みに合わせた、昨日は夕方六時に寝たから睡眠もばっちり、肌荒れも特になし、リップもしっかり塗った、爪も切りそろえてきれいに磨いたし、まつ毛も整えた、耳も掃除したし、その他のムダ毛も全部処理した、マフラーは彼と一緒に巻けるように長めのものを用意したし、手袋も編んだ、財布やその他の小道具の用意もした、バッグは一番新しくて少し値段が張ったものに変えたし、それに――ウフフ」

ひとしきり確認作業を終えたところで、私は鏡台の前から離れる。

もう何度目になるか分からないが、こうして細心の注意を払って準備の確認をする。

つい先週の事、私は彼と久ぶりに会ってデートの約束をした。

私と彼はかれこれ付き合い始めてから一年近く経つがお互いに予定が合わなくて、それに彼の方がどうしても出不精で、それにあまり良いとは言えない気難しい性格であるため私と二人で出会うことはことのほか少なかった。それでも、決して彼は私のことを嫌っているわけではなく、むしろ日ごとに私のことを深く愛してくれていて、浮気している様子も今のところ（独自に調べた結果）なく、彼には姉妹がいるのにもかかわらず私のこと気を使ってくれて、お弁当などを私のために作ってきてくれたこともあった。もちろん、私も何度か彼を遊びに誘ったことや、デートへ誘惑した時もあったのだけれども、やはり彼は忙しく、なんでも彼は両親がいないためほとんど一人で家事を切り盛りしているようで、それで平日は当然時間が空かないので、それに休日も休日で生活費を稼ぐために学生でありながらとある企業で務めているため、とてもじゃないがこちらから強引に予定を開けさせることなんてできなかった。

そんなこんなでここ最近、つまりは先週に彼と会った以前は、約一カ月は会うこともなく、電話を掛けたり、メール交換はしていたけどそれも数回で、なかなか長い時間二人きりでいることはできてなかった。

だけど、私は気にしていない。

彼はそういう人だ。

私は彼に対して一つも不満を持っていない。

彼は私のことを拒んだり、無視したことはない。

それにこうして、彼自身からデートに誘ってくれた。

だから私は満足している。

壁に掛けてある安物の時計は約束の時間まであと四時間だと告げているのが見える。

さてと、思いにふけるのもこれくらいにしておこう。

口元が綻ぶのはどうしても止めることができないけど、妄想も幻想もほどほどに。

私は彼にもらったコートと今日のキーアイテムを持って、自分の部屋を出た。

「……ウフフ」

待ち合わせには遅れないように二時間前ぐらいには着いているようにしないと。

彼は約束の時間ピッタリに来るから、色々と予定を考えておこう。

もし遅れたりしたら、

「――――ウフフ、ウフフフフ」

◆

ぞわり。

「――――うおっ、ふぃくしゅっ！」

得体のしれない寒気が突然背筋に流れ込み、そのせいでくしゃみが出てしまった。

「何だろう、今のは？遅れてやってきたような寒気だったのだけれども」

今更感がたっぷりとある僕への警告だったような気がした。

何故か不吉な予感が頭の中をよぎる。

「噂話というレベルの寒気じゃないな」

まあ、誰かが僕のことを考えていたとしても、それはそちらの自由なため、どうにもすることはできないが。少なくとも、今の僕には何もできないだろう。

と、そんなことを考えながら、僕は駅前にある全国的に有名なドーナツのチェーン店に来て、ドーナツを買うために少しばかり長い列に並んでいた。

僕自身は甘いものはさほど好きではないため、ガラスの向こうにこれ見よがしに並ぶドーナツの味の良し悪しは分からないが、それでもこうして綺麗に並べられているとどれもこれも美

味しそうに見えてしまう。

僕の二つ前に並んでいる親子連れ二人の母と子。その子供の方は同じことを思ってしまったようでガラスに張り付いて、物欲しそうな顔で、まるで宝物を見るかのように眺めていた。母親はそれを実に優しそうな顔で、しかしながら呆れが含まれた微笑みで子供の様子を見守っている。

平和だな。

と、どうでもいい感想を漏らす自分。

傍から見れば微笑ましい光景ではあるが、見る人によってはいろいろなことを考えてしまう、そんな一シーンな気がする。僕は平和だと思ったし、例えばその子供の母親は愛おしく思っていることだろうし、例えば子供本人はドーナツに夢中で何も考えていないだろうし、例えばその他のお客は無関心かもしれないし、もしかしたら店員さんの方は迷惑に思っているかもしれない。

じゃあ、例えばそれを平和を知らない人が見たとしたら。

又は、平和から足を踏み外した人が見たとしたら。

具体的には、戦争孤児とか、犯罪者とか、暴力団の関係者とか、死刑囚だったりしたら——あるいは、

「——ありがとうございました」

店員さんから〇円ではもったいないぐらいに輝かしいスマイル（男性）を貰い、ドーナツが入っている白い紙の箱を片手にぶら提げて、その店を出た。

選んだドーナツは全部で五個。選び方は適当に一番売れて売る奴から順に選んだ。

一つあたりの値段は全て一緒だったために、大して考えることもせずにスムーズに買い終えた。

「……寒い」

店を出て一番最初に呟いたことはそれである。

『宇都宮駅前、凄く寒い、なう。』

と、ネットでやる某つぶやくあれにそう呟きたくなるほどである。

時計の針は既に夕方の五時を回っているため、十一月二十四日現在では当然とっくに日の入りを迎えていて、空は暗くなっている。また、この季節になると今の時間帯は非常に寒い。太陽が出ているときと出ていないときの寒暖の差が激しく、また木枯らしが駅前によく乱立している酵素建築物にぶつかって、所謂ビル風となってこちらを吹き付けてくるためより一層寒い。

思わず一つ身震いをしてから、ポケットに片手を突っ込んでしまった。

ネックウォーマーに鼻までうずめる。

冬の寒さは毎年体感しているにもかかわらず、一向に慣れそうにもない。毎年毎年風が体を打ち付けるたびにこの季節を恨めしく思ってしまう。

唯一の救いは、というか、悪くないことというのかもしれないが、この寒さは今外に出ているこの場の全員が体感しているということである。冬の寒さは無差別だ。老若男女容赦ない。貧富の差も吹き付ける木枯らしの前では変わりない。たとえ年収が一億を超えるようなリッチだってこの場にいる限りはその寒さを身に持って体感しなければならいのだ。

そう考えると心が落ち着く。

実に根性の曲がった価値観だが。

今日はバスカードを持ち合わせていなかったので、俺にとっては残念ながら徒歩で待ち合わせ場所に向かうことになった。

待ち合わせ。——つまりは、待ってくれている人いるということで、言ってしまえば僕の彼女のことで、何故待ち合わせしているのかと言えば当然デートと言うことで。

どやあ。

なんて、ドヤ顔していられるような関係でもないのだけれども。

僕と彼女は、男女交際をしているわけなのだが実はほとんど二人で一緒にいたことが無い。付き合う前もそうだし、付き合いだしてからも大して会っていないのだ。

その原因は完全に僕にある。

単純に忙しい。——とは、言えない。

本当はもう少しぐらいは彼女のために時間を割けたとは思うのだが、どうしても彼女と会うことができなかった。その辺りの込み入った事情を詳しく話しているとおよそ二十ページは消費してしまいそうなので割愛するが、解り易く簡易にまとめれば、家族のため、僕のため、仕事仲間のため、そして何よりも大切な彼女のためでもある。

宇都宮駅西口からの大きな通りを少し歩みを速めながら進んでいく。

無差別に吹き付けるビル風は僕を含めた通行人の体温を奪い、凍えさせようと唸りを上げた。

真っ暗な空ではあるが流石に駅の付近なだけあって、道の近くに綺麗に整列している街灯とビル風をアシストしている高層建築物（大して高いわけでもないが）の明かりが町全体を照らしているようで、とても明るい。

ここで少し彼女のことについて語ろう。

僕の彼女ははっきり言って異常である。価値観が一般的な人よりも大幅に狂っていて、本当に自分に大切なもの以外は興味・関心を示さない。家族がいないため一人暮らしをしていて、尚且つ親戚や友達もいない。極端にコミュニケーション能力に劣っているため新たに友達を作ることもできないし、もともと他人に興味示さないため常に孤独で孤高で何よりも尊かった。

中学生の頃に僕は彼女と出会った。正確には、出会ってしまったと言った方がいいかもしれない。なんせ僕は出会い頭に彼女の持っている鉈で頸動脈を切り裂かれそうになったのだから。驚くことに、いや驚いた方がいいことに、彼女は当時中学二年生でありながら生活費を稼ぐために犯罪に手を染めて強盗殺人とか、運び屋（薬物やら違法輸入された銃火器などを組織から組織へと警察に運ぶ仕事）などをしていたようだ。結果としては彼女は僕を殺すことはできなかったし、犯罪稼業も僕が紹介した給料がいいブラックな会社にアルバイトみたいな契約で働くことで今は辞めている。そして僕の彼女となった。

過程が省略されているのはしょうがないことだ。僕が彼女と付き合うことなった理由は彼女に殺されたくなかったからだし、彼女の方もただの気まぐれを起こしただけだった。酷く歪で、壊れている関係であることは僕も既に自覚している。

彼女の価値観が狂っているのは昔から一人で生きてきたことによる副産物で、どうにもしようのないことで、仕方がないことだった。だから認めた。僕が彼女の彼氏になるにあたって、彼女が過去にしてきたことや僕を殺そうとしたことも全てまとめて許容した。

僕を殺そうとしたことも、当然許して和解した。

犯罪行為というのは、もちろん殺人を含めて倫理の問題を除けば大したことじゃない。

その倫理が有るか無いかで大きく人として違ってしまうのだけれど、しかしながら、少なくとも僕と出会った時中学二年生でありながら親も親戚もいないで一人暮らしをしていた彼女に、果たして倫理などを気にしている余裕があったものだろうか。

アルバイトは年齢をごまかせない容姿である彼女にはできなかっただろうし、頼ろうとすれば色々な施設や機関に頼ることができたのかもしれないが、それを中学二年生の女子に、そして極端に人とコミュニケーションが取れない彼女に求めるのは酷だった。

ではあと残っている手段と言えば、女子中学生にできる仕事なんてそうそうないわけだし、自分の体でも売ることぐらいしかないのではないだろうか。

どういう経緯を経て彼女が犯罪行為に手を染めるようになったのかは、残念ながら僕は聞いていない。でも何かしらの選択やら決意やら覚悟はあっただろう。

罪を犯す覚悟や、人を殺す覚悟とか。

「……だから、どうしたことか」

宇都宮駅から少し歩いたところにある〝みやのはし〟という橋を渡っていく。あまり長くはない橋だが駅につながる大通りのためか、車道も歩道も幅が広い。

相思相愛を見せつけるように二組ほどのカップルが手を組んで（指を絡める恋人つなぎという組み方で）通り過ぎていく。砂糖を吐きそうになった。

通行人の中にロングコートを着て、ヒールが高めのブーツをコツコツと忙しなく鳴らしながらすれ違っていく女性がいた。その姿から想像できる通り急いでいるようで、小走りで僕の横を通り過ぎていった。

ふと気になって右手の腕時計で時間を確認した。

「約束の時間まで……あと三十分ほどか」

あの女性のように急ぐ必要はないだろう。

待ち合わせの東武デパートまでは歩いても二十五分程度で着くので余裕綽々ではあるが、僕の彼女は遅刻にとてもつもなく厳しい。この前は三十数秒遅れただけで持ち合わせていた文具のハサミを首筋に突き付けられたぐらいだ。秒単位の遅刻ぐらいは大目に見て欲しいものだが、僕に非があるのは間違いなかったためその場で謝罪してどうにか許してもらった。まあ、そう言った細かいことで彼女が怒ってくれるのもの僕だけの特権なのだけども。死にたくはないが、嬉しいことには嬉しい。

「あまっとろい話だな。当事者だけど」

しばらくして。

とある大きな交差点を渡っていくと目の前に大きなホテルが見えた。クリスマスに向けてのイルミネーションを壁に付けていて、絢爛豪華な雰囲気を醸し出していた。

「クリスマスまでまだ一カ月近くあるというのに随分と気が早いものだよな」

実際には二ヶ月近く前からこのイルミネーションはされている。

近くを通ると、そのホテルの門のあたりにポスターが張られていた。

『〇〇〇〇さんのクリスマスディナーショー12月10日』

と書かれていた。

因みに、伏字にはしたが呼ばれてくる有名人はあのさそり座

の歌をよく歌っている、低音で独特な声持つ歌手だったりする。
それにしても、クリスマスの2週間前ほどにクリスマスディナーショーとはこれいかに。

さらに進んで、コンビニが見えてきた。
そこのコンビニは独特なもので、カフェみたいにカウンター席がありそこに座って買った商品を食べることができたりする。
但し、目の前がガラス張りの席なために外の通行人から丸見えで、割と外から見ていると恥ずかしく感じたりする。特に女子高生が態度悪く座っているときなんかは最悪だ。もう公害と言っていいほどに。
「外見って、自分が感じているものと他人が見ているものはかなり大きな差があるものだよな」
自分では気付けないため、酷い痴態を平気で晒している。
「なんとも無残なものだが」
でも、自業自得な気もするが。普段から姿勢やら行いが綺麗な人いるわけで。
因みに、僕の彼女は犯罪を犯して生活をしていたのにもかかわらず、マナーや礼儀は割としっかりとできている。フランス料理を食べるときの作法を完全に覚えていると言った時には流石に疑ったが。そしてその後、出刃包丁を耳すれすれに突きつけてきたが。
本当に怖い。死にたくないな。
と、昔のことを思い出していたとき不意に自転車が一台通った。
タイヤのゴムがないホイールの状態で騒がしい音を立ててすぐ近くをすれ違っていった。
「……」
あそこまでいくと、もう外見を気にするというレベルではないな。
「本当に愉快だな。……宇都宮」

さらに歩いて少し大きめの交差点を左に曲がって、そこから近くに商店街の入り口がある路地のところで右に曲がる。
そこは今まで歩いてきたアスファルトとは違い、レンガのような石のブロックが敷き詰められている道だった。
別に大通りを通って行ってもよかったのだが、こちらの方が少しだけ歩いて向かうには早い。
大通りほど道は広くないが、車があまり通らないので歩きやすい道である。
その通りにある模型屋の前を過ぎていく。
その模型屋はかなり古くからあるようで、店主の年齢は確か

七十歳近くだったと思う。

かなりのプラモデルがそろっていて、店長の気まぐれで値引きしてくれたりもするいい店である。

さてと、その通りを過ぎるといよいよオリオン通りが見えてくる。

僕はそのオリオン通り手前の交差点の信号で足止めをくらった。

目の前にあるオリオン通りは完全にクリスマスムードでイルミネーションの装飾があちらこちらに施されている。

僕はまた時間を確認した

「……五時五十二分。ヤバい、待ち合わせまであと8分もない」

のんびり歩きすぎた。語りながら、状況説明をして歩くものではないな。

信号が青に変わるとすぐに僕は小走りで駆け出した。

手に提げているドーナツを揺らさないように注意をして先を急ぐ。

通り過ぎていくオリオン通りの風景はクリスマスムード全開でとても煌びやかで和気藹々としていた。

この風景をゆっくりと歩いて楽しみたいものだが、もし約束の時間に遅刻すると命に係わるため、断腸の思いでというほどではないが残念ながらすぐさま通り過ぎる。

すれ違う人々も急いでいるような人はほとんどいない。

気ままに歩いているという感じだった。

二つ目の信号が点滅しているのを全速力で走り抜け、カフェやゲーセンを横目に見て、前から迫る自転車を避けつつ、前に進んでいく。

すると、左側から先ほど見たホテルよりも豪華なイルミネーションが施されている広場のようなものが目に入った。

「おお！」

思わず声を上げてしまった。早とちりしているクリスマスも悪くないものだなと思った。

やっとオリオン通りの入り口が見えてきた。この分ならぎりぎり間に合うだろう。ラストスパートだ。

そうして、全速力で走り抜けようと思ったとき、不意に僕の視界の右端に暗く細い路地が映った。オリオン通りとはまるで違う、不気味で妖しい光を放つ路地だった。

その路地は所謂風俗店などが立ち並ぶ通りだった。

オリオン通りなどが宇都宮の街の表の顔ならば、この路地な

どは裏の顔。
ピンク色の看板が立ち並ぶその路地は、オリオン通りのイルミネーションとは相対的だった。
しかし、別にこれはおかしなことじゃない。どこの街だってこういった路地はある。
表の顔があるならば裏の顔だって、当然、あるはずだ。
僕は何とも言えない不安感に包まれた。
似ていた。
僕と彼女に酷く似ていた。
外見では彼氏彼女のカップルでも、その実は犯罪者とその被害者が歪な関係で一緒にいるだけだ。
もしかしたらこの街よりも裏表が激しいかもしれない。
「それが一体、何だっていうんだろう?人間ならば誰でも裏表があるのは当たり前だろう?なのに、僕たちだけが不安を感じていてもしょうがないだろう?」
この不安感は差別的だった。
冬の寒さより辛かった。

「マコト!!」
彼女の声がした。
「マナか、迎えに来てくれたのか?」
オリオン通りの入り口に彼女はいた。
「うん、ちょっと気になって。……それよりも、どうしたの?凄く辛そうな顔してる。何あった?」
彼女がマフラーを揺らしながら、こちらの顔色を心配して尋ねてくる。
「いいや。……別に――何もなかったよ」
僕はそう答えた。嘘ではない、見えを張っただけだ。
「――はい、これあげる」
僕は手に持っていたドーナツの箱を手渡した。話を逸らす様に。
「え……、ありがとう」
彼女は嬉しそうに、ワレモノでも扱うかのようにして大事にそれを受け取った。
心なしか、彼女の頬が朱くなっていた。
「じゃあ。……私からも」
そう言って彼女は、値段が結構しそうな綺麗なバックから小さな包みをどり出した。
その包みはきちんと包装され、リボンが結ばれていた。
「誕生日おめでとう」
僕の手に彼女からその小包が手渡された。
渡された時に触れた彼女の手は冷たかったが、とても温かっ

た。

「これからも、ずっと一緒にいようね」

彼女は笑って、僕の手とって指を絡めるようにして恋人つなぎをした。

「……そうだな。ありがとう、マナ」

僕も笑い、彼女の手を軽く握り返した。

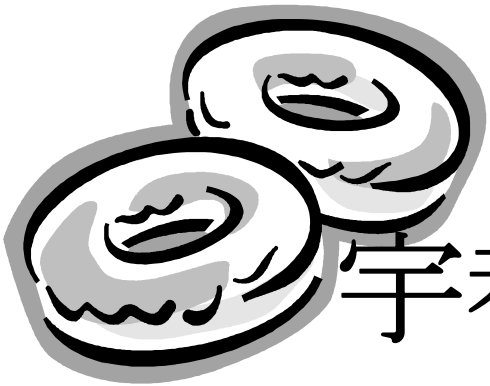
何処の誰がどう言おうとも、僕と彼女はカップルで幸せ者だ。

心に在った不安は、温もりに代わっていた。

「それで、マコト。――三秒遅刻しているんだけど」

彼女が強く僕の手を握りしめた。

どうやら、バッドエンドは確定らしい。



探索旅行

汐織　郷馬

何をするわけでもなく、雑踏をぼんやりと眺める。発生源をこれ確かと言い当てらない雑音の中に身をうずくめる。自分は染まっていっているのだろうか？　それとも褪せていっているのだろうか？　頭で考えなくては感情が決まらないなど、なんて不便なことなのだろう。

どこまでも自分を漂白したい。そういった欲求は度々湧き起こっていたことだった。この世に生を受けてから、僕はずっと地元のコミュニティの中で育ってきた。そして何故かこんな考えを抱くようになっていた。

「僕は作られている」

ひたすらに地元の価値観の中で生き、風俗に曝され、同じように教育を受けてきた大人や子供と交じらう。これでは僕はただの一地元民として量産されるだけになってしまう。僕の思考はこの棺の中で固まって腐ってしまう。恐れだけが僕の思春期だった。

だから、僕はこの恐れと穢れとを漂白しなければならなかった。周囲の価値観による洗脳から目覚めて、純真で真っさらな僕の自己意識を手に入れなくてはならないのだ。そのためには、僕自身をあらゆる価値観により比較する必要がある。何よりも初めに僕の住む町から脱出する必要がある。

どうやら世間では僕の一連の行動を、「自分探しの旅」と揶揄するようだった。

ただただ遠くに行こう。そう思って、何も考えずに高い切符を買い求めた。途中富士山を横目に捉えて、列車は僕を西へ西へと運んでいく。存外日本は広いらしく、ここまで来てしまえば、僕の地元の残滓すら感じられなくなっていた。標準語も少しは使われているものの、僕の故郷の訛りは無く、独特の方言は実に心地がよいものだった。貯金はたっぷりとあるのだ。気の向くままに放浪して、心とアタマを洗濯させてもらおう。そう脳内で呟いて、改札口をくぐり抜けた。

駅は、特に僕が今立っているような大きな駅は、実に万人受けするように作られているものだなと慨嘆に浸る。売店は東で見かけた物とほとんど変わっていないようであるし、駅員は不自由なく標準語を操っているようであった。ホームの配置は独特ではあったが、僕はその辺りを特に気に留めるということはなかった。なので、初めの期待から比べてしまうと、僕は少しだけ落胆してしまっていた。

『この電車は――』

いつの間にか私鉄に乗り込んでいたようだった。だがそのこ

とは問題ではなかった。いや問題ではあったかもしれないが、嬉しい問題、出来事というやつであった。僕は鉄道に関する知識は皆無であり、明言を避けざるを得ないものの、どうやらこの地方となると私鉄では独特の訛りが見受けられるのだった。やはりここは僕におあつらえ向きの場所なのだ。その予感が外れていなかったことに、自然と口角が上がるような気がした。あくまで、気がしただけであったのだが。

「ああ、お兄さんそっちの出身なんやぁ。やっぱり毎週餃子を食べはるん？　オジさんは昨日食うたで」

「いえ、そんなに頻繁には食べませんよ。僕としてもなんで餃子の街なのか疑問に思ってるくらいですし」

店員が気さくに話しかけてくることは地元であれば許せないことであったが、ここでは御愛嬌で済ませられる僕がいた。しかしのどかに会話をしているよう見えるが、僕の心の内部は大時化だった。初めて会った人間が僕を何で判断するかといえば、出身地が大部分を占めるものの一つとなるだろう。そして僕はそれによってラベリングされる。言っている本人からすれば会話の流れにおける戯れに過ぎないのだろうが、僕にとっては多大なる挑戦であった。

「ふーん、そういうもんなんや。ここらの人間はみんな週に最低一回はたこ焼き食うけどなぁ。そちらさんはそうでもないんかぁ」

はは、と軽く笑いを返しておく。この人当たりの良い禿頭の中年も結局のところはココの価値観に毒されているのだ。確かにこの街は僕にとってはとても有益な場所である。しかしこの街に暮らす人間にとってはどうだろうか。僕が地元に感じているような感覚を抱かずにいられない所だ、と言う者がきっといるはずである。そういった者には是非とも僕の町にでも来て、思う存分鬱憤を晴らして貰いたいものだと、切に願うのであった。しかしどうなのだろうか？　僕はこの街でも僕の町に似たものを見つけてしまって多少機嫌がよくないし、住人たちは僕に無自覚のまま挑戦状を突きつけてくる。これはこの街に暮らす僕の共感者とも言える存在が僕の町を訪れたときにも当てはまることなのではないのだろうか？　だとすれば――――

「ままならないなぁ」

――思わず声が漏れてしまったようだった。

結局、僕はどんな人間になるのがいいんだろうか。そんなことも定まっていないのにこんな旅をしているのか、と問い詰められそうではあるが、それを「真に自由に」定められるようになるのもこの旅の目的の一つなのだから、多少は大目に見てもらえると嬉しいなと脳内で独りごちる。

少し前、まだ義務教育を受けていた頃は、自分が世界で唯一であることを体現できるようになりたいのだと思っていたと記憶している。そんなことが夢物語に過ぎないことには存外早く気づくことができた。だが僕はその微笑ましい自意識の形成を機に、衆愚の一部になることを極端に恐れるようになったということは間違いがないのだと思うのだ。そして僕は自分の感情を疑うのだった。もしかすれば、この恐れすら何か見えざる強制力とやらによって生み出されているものなのではないか、と。この疑心すら己が衆愚の一部であることの別の表現なのではないか、と。

自分が間違いを犯していることに気付くことの出来る人間は多くない。だとすれば、一度間違えさせられてしまえば、僕は一生の間、間違えたまま生き続けていくというリスクがある。だから僕は、自分を間違えることなく「真に自由に」己を定められるように、まずはなりたいのだ。

「目を開けてください」

人から「真に自由な」思考を奪ってしまう危険と不即不離であるから僕は宗教に対してとても否定的ではあるが、座禅をすることについては、まあ悪くないと答えるだろう。目を瞑り、暗闇の中で深く深く思考を整理する。これは、自分を間違えないようにする点では実に有効な手段であると考える。現に今僕はなぜこの旅をしているか、それをしっかりと認識できたはずなのだ。決して揶揄されて当然の薄っぺらい情動ではないと、僕が僕を納得させられる答えに触れることができた、と思う。

西に向けていた足を少しばかり引き返して古都を訪れる。お金がもったいない気もしないでもないが、貯えを当てにさせてもらう。

歴史を感じるというこの感慨は一体どこからくるものなのだろうか？　僕は別にこの辺りに知故があるわけでもなく、せいぜい修学旅行だなんだで訪れたかそうでないか程度の関わりしかない。にもかかわらず望んで注意を払われ維持されている古臭い家屋やら道やらを見ると、どうしてこうも満たされるような錯覚を抱いてしまうのだろうか。「日本人特有の感覚」なんて周りの人間は言っていたか。それは僕にどう影響する感覚なのだろうか、「僕」を殺すような感性なのではないか、などと余計なはずだが僕にとっては慣れ親しんだ助言者が目の前の風景に冷や水を浴びせる。僕は別に冷たい水を浴びることは嫌いではないので、ふんふんと通り過ぎさせてもらおう。損な性格だなと流石に思うが、ね。

紅葉はすでに散っていて肌寒さを感じる並木道。おそらくこの辺りが例の有名な CM で出てくるところなのではないだろうか。それにしてもあの CM の吸引力というのだろうか、は素晴

らしいと思う。音楽、映像、ナレーション、どれを取ってもこれしかないと思わせるようなものばかりだった。こんな面倒な性格の僕はCMは、というか大方のテレビ番組は基本、侮蔑と嫌悪と身を寄せ合って目にするのだが、あのCMは違った。まことに遺憾ながら、僕がここに足を運んだことの意識外の要因になっているという疑いもあるのだから。

帰属意識。これも多分僕の敵の一人なのだろう、と慰霊のモニュメントの前で考えるのはいささか失礼かつ不謹慎だろうか。現代文の問題集かなにかで、ハワイの戦没者引き上げの際に見ず知らずの日本人も心を動かすのは実に納得のいく情動だ、といような内容の文面があった気がする。勿論、問題集に載っている文であるので後に解説はなされているのだが、初めこの文面だけに出会ったときはふざけているのか、とつい文句を垂れてしまいそうになった。その他はスポーツだろうか。帰属意識やら何やらの観点から僕を挑発してくるのは。ファンやサポーターの「集団ヒステリー」とやらは、僕が暑い夏を乗り越えるのに一役買ってくれている。特にそれがナショナリズムだの結びついた時は目も当てられなかった記憶がある。

何だかんだといって、ポピュラーな観光地にしか来れていない自分に不信感を抱く。別にこれらの観光地が悪いと言うつもりは更々無く、どうやら疑って考えて確かめることを忘れている自分に警鐘を打ち鳴らしたいだけなのだ。僕は未だ自分の直感が正しいなどと思えるほど生きていないのだ。

「シャ真をトってもらってモ？」

カタコトでありながらも的確に写真を依頼してきた外国人たちと少々の会話をする。海辺のこの香りは内陸に住んでいる僕には馴染みの無いもので、どことなく酔うような感触であった。外国人たちは言葉は多少不自由でも知識教養は相当あるらしく、僕も持てる限りの頭を使って会話をした。結果、彼らは日本観光を満足してくれそうであった。

「アナタはいい日本ジンですね。ここにクるまで中々日本の詫びサビとか、感性について話せル人が多くなくて」

「それは――光栄です。では、また」

意外、というどころの話では無かった。僕は認められたのか否定されたのか、よく、分からなかった。

意識に靄がかかったまま、一番初めの街に辿りついた。独特な構造の駅の中では、標準語と方言が乱れ飛んでいる。何をするわけでもなく、雑踏をぼんやりと眺める。発生源をこれ確かと言い当てらない雑音の中に身をうずくめる。自分は染まっていっているのだろうか？　それとも褪せていっているのだろう

か？　頭で考えなくては感情が決まらないなど、なんて不便なことなのだろう。あの言葉は何を意味するのだろう。僕は結局のところ僕の周辺物からは逃れられないのか？　僕が僕として「真に自由で」いられるなんて空論にすぎないのか？

乗り換えを確認しようとスマートフォンを起動する。半分失踪に近かったからか、もの凄い量の連絡がきていた。これはどうしようもない。土産はしっかり選ぶのがよいかもしれない。そうして駅の土産物コーナーに目を遣る。ソースの街になぜか伊勢名物があるのが少し可笑しかった。だが、羨ましかった。どんな目にあっても正義を貫いていられそうで。土産はこれにしよう、そう決めるのに時間は掛からなかった。

新大阪



ブラックコーヒー

片桐　修

東京都は中野にある、某星のカフェ全盛の現代においてなんとか生き残っている小さな喫茶店、クラシック流れる店内には、俺こと仁科良と、目の前に座る交際相手、朝霞桜花が二人で午後のティータイムと洒落こんでいた。

彼女は美少女だ。ベネ（良し）を百回言ってもまだ足りないほどの。本人の明るい性格を思わせる茶髪と同じ色の目、天然でウェーブがかかっている髪を肩甲骨まで伸ばしている。友人の幼馴染の黒髪の女性と並べばかなり画になる。見ているだけでため息が出そうなほどだ。

同じ明神大学に通う二年生、学部は違えど同じキャンパスに学部を置くため双方の都合がつくときはこうして喫茶店に待ち合わせ、二人の時間を過ごしている。

俺はというと昨日購入した文庫本を読みふけり、桜花は

「うん。マスターのケーキは安定だね～」

と幸せそうに喫茶店の店主が開発した新作ケーキに舌鼓を打っていた。名称は「カボチャに負けるな！ハロウィンに負けるな！甘さなら俺の方が上だ！！！紫芋ケーキ！！！」という感嘆符のインフレのようなケーキ。収穫後しばらく寝かせることによりその甘味を増幅させた紫芋をふんだんに使っているらしい。色としては……すごく紫である。

しかし、よく桜花もこれだけ甘いものに囲まれて飽きないな。俺ならケーキ一口でギブアップするぞ。甘いものが苦手な俺の目の前にはブラックコーヒーとジンジャークッキー。クッキーの皿は既に空だ。対する桜花側には紫芋のケーキ、先程まではカフェモカとモンブランが陣取っていた。カロリーとか考えているのだろうか……

カフェモカに次いで注文した桜花のアッサムティーが到着する。

「ふんふふーん」

とミルクを注げば、琥珀色の空に真っ白な雲がかかる。砂糖を二三入れれば、茶の渋みもなくなり、ミルクと合わさった優雅な甘味が口を満たすだろう……ケーキに合わせるには甘すぎるが。

「お前もよくそんなに甘いもんばっか食えるな」

「子曰く『甘いものは別腹』なんですよ」

「言ってねえ」

と言葉を交わすと、彼女はフォークに一口分、ケーキを突き刺しこちらへ持ってくる。

「……なんのつもりだ」

聞けば、イタズラを思いついた子供のような顔で言ってくる。

「別腹の秘訣?を教えてあげようかとね」
「ほう、ならご教授願おうか」
言い返し、口にケーキを運ばせる。
……甘い。さつまいもに近いがそれとは違った甘味である。砂糖の類を思わせる甘味ではなく、紫芋のみの自然な甘み、普通ならこれでいいのだが、いかんせん俺は甘いものが好きではない。口を改めるためにもブラックコーヒーを……無い。ちょっと前までカップの六割を満たして鎮座していたコーヒーが、カップごと目の前から消え、桜花の口元に寄せられていた。
「ちょ、返せよ。お前ブラック飲めないくせに……」
コーヒーを取り返すため、テーブルに軽く身を乗り出して手を伸ばす。
桜花はカップを置くと、俺に、その艶やかな唇を寄せ……重ねてきた。
ややあって、俺は弾かれたように自分の椅子に背中を預ける。当の桜花はニヤニヤと「これでいいんでしょ?コーヒーだよ?ブラックだよ?」と伝えるように笑う。確かにコーヒーだ。ブラックコーヒーだ……
それにしては、甘すぎる。

中野



土産狂想曲

坂巻　蝸牛

「……」

「……」

僕らは今、新婚旅行中だ。ホテルの移動中、両者無言。

どうしてこうなったのかは理解が及ばない。というか、夫婦といえど他人同士理解し合えることなんて絶対にありえないんだけれど。

いや、落ち着いて考えてみよう。これは実にくだらない話だ。時は2時間ほど前にさかのぼる。

土産屋で買い物をしてる時はまだ関係は良好だった。

「お土産何にする？」

「新婚旅行にお土産って必要かな？」

「何言ってんのよ。必要に決まってるじゃない。誰も受け取らなかったら私がもらうのよ」

「ああ、お前はそういう人だよ」

諦めよう。こういうところも魅力だと思って。

「泡盛いいなあ。あ、泡盛。泡盛なんかもいいなあ」

お前なあ。真面目に選んでくれ。

「なあ、僕はこれなんかいいと思うんだけれど」沖縄銘菓紅芋タルト、と書かれた商品を手に取って見せる。

「ダメよ。なんか沖縄って感じがしないのよね。紅芋ってなんかパッとしないし」

「全国の紅芋好きに今すぐ謝って来い。まあ、受けは多分そこそこといった感じなんだろうなあ。じゃあ、これなんかどうだ？」

コンビニでも良く見かけるアソートキャンディやスナックの沖縄限定バージョン。文句ないだろう。

「んー。無難。無難すぎてなんかこう、『やっぱり』って感じがする」

「お前は土産に何を求めているんだよ！」

どうやらどうしてもお酒が欲しいらしい。

「あ」

顔を下に向けると、そこには「ちんすこう」の文字が。

「これならどうだ？沖縄、って感じもはっきりするし、一周回った意外性も期待できるだろ」

妻は一瞬納得の表情を見せたが、反論が始まった。

「あ、あっと、ダメ！認めないわ！み、認めない！」

「何が認めないだよ。理由を言え、理由を」

「だ、だってそんな名前のものご近所に配れるわけないでしょ！はしたない！」

「お前言っちゃいけないこと言ったな！大体なあ、ちんすこうの由来は「珍しいお菓子」って意味なんだよ！昔は王族貴族しか食べれない高貴なお菓子にお前なんてことを！撤回しろ！」

もっともらしいことを言ったが、見えてるパッケージの受け売りだ。自分でも言いながら納得した。

「な、とにかく、私は泡盛以外認めないわ！お酒こそ至高よ！」

お前、それ近所に渡す気さらさら無いだろ。

「もういいわよ、ご近所さんたちにはしたない家だと思われればいいでしょ！それでいいわよ！」

「そういうこと考えてるからはしたないんだろうが。取り敢えずさっさと買うぞ」

周りの客の視線がさっきから痛すぎる。

そしてちんすこうを購入後、膨れる彼女を車に詰め込んで、現在に至るというわけだ。

考えれば考えるほど彼女が悪いのだが、取り敢えず謝った方がいいのだろう。

「なんというかその・・・さっきはごめんな。詫びと言ってはなんだけれど、ホテルに着いたらそこの土産屋で泡盛、買おうか」

すると彼女の顔にみるみる生気が戻り、「わかればいいの。許したげる」と勝ち誇った。

選択を誤ったかもしれない。謝っただけに。

「上手くもなんともないわよそれ」

お見通しね、はいはい。

「やったー！今夜は酒盛りだー！」

はしゃぐ彼女。お土産という話はどこへやら。

ルームミラーを見て驚愕したのは、彼女の手に握られている瓶である。

「お前、それ……」

彼女は、涼しい顔して

「ああ、先にレジ通しておいたの。あなたに反対されると思ってね」

「じゃあ、なんでわざわざ俺にねだった」

今自分がどんな顔をしてるのは分からない。分かりたくもない。

「家呑み用？こっちはホテルで呑む用」

「これからゴーヤ直売所に向かう。帰ってから2週間はゴーヤ以外口に出来ると思うなよ」

後ろから彼女が飛び掛かってきた。あ、ちょっと待って。そんなに暴れたら。

ハンドルを思わぬ方向に切って、電柱に衝突。おい。レンタカーが。

「あはははは、これでゴーヤの危機は免れたわね」
「いいや、これからは火の車じゃ済みそうにないぞ」
「何言ってるのよ、まだこの車炎上してないじゃない」
何も考えてないんだろうな。この女の人は。
請求書の額を計算しながら思う。
今俺、すげえ幸せだ！

沖縄

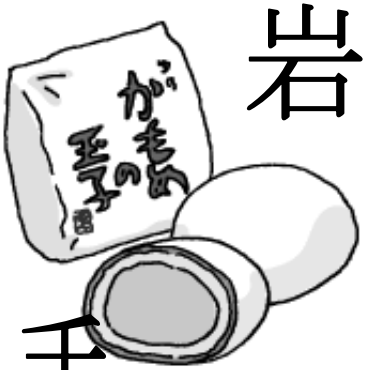


お土産

天頂バス

小学生の頃、父は東北に単身赴任していた。
週末に父がお土産を持って帰ってくる。
そこには、大船渡市名物のかもめの玉子があった。
私は小さな口でそれをほおばった。
今では父の勤務先が変わり、もう食べることがなくなった。
ああ、あの懐かしい味をもう一度。

岩手



「そうだ、京都行こう」

脳内に決定的かつ劇的な発想が浮かび上がった瞬間の歓喜は知らず知らずのうちに声帯を震わせ、周囲から奇っ怪な目で見られるのを助長してくれる。黙り込んでしま知った友人二人及び周囲の客は私の正常な精神の有無を疑っているであろうと推測させる空気を感じじつつ、なんの前触れも脈絡も繋がりもない先述の突飛な言動に対して反射的に反応出来る人間はいないであろうとも思った。自分の友人が唐突に「そうだ、京都行こう」と行ってきた場合私は発言者の求めるレスポンスを的確に選択して返す自信がない。それに静かな喫茶店でいきなり何か素晴らしい発見をしたかの如く感嘆に満ちた声で意味不明なことを言う人間がいたら私は懐疑の念を込めた視線で一瞥して首を傾け眉を顰めるであろう。自分の先ほどの言動を客観的に振り返ってみると冬だというのに頬が熱くなってきた。何事もなかったかのように装ってコーヒーを流し込んだが慌てすぎて大量に流し込んでしまい舌を火傷した。

先程の言動が周囲にどう映ったかどうかはさておいて唐突に私の頭は京都旅行の願望によって満たされた。唖然としていた二人の友人に対してこの意味不明な発言にさして重要な意味はないから忘れてくれという旨を伝えて今後の人間関係に油を差そうと努力しながら脳内では既に旅行の日程を考え始めていた。しかし思い浮かんだ際の強烈な爽快感とは裏腹に京都旅行の目的というものが脳内には見つからないのである。京都のどこの観光名所も寺社仏閣も私にとってなんら魅力的なものではない。既に私は京都旅行への強烈な意欲に支配されているがその理由が分からず、突飛に意味不明な発言で場を沈黙させてしまうレベルの私の頭は異音を立てながら古いハードディスクのように鈍くぎこちなく回転している。潤滑油が急を要して必要なのは友人たちとの交友関係ではなく私の頭かもしれない。螺子も足らないはずだが。ようやく何事もなかったかのように先程までと同様に戻った会話が耳に入ってくるが私の脳は入ってくる言葉の意味を理解するほど高性能ではなくて友人たちの会話をただの波に成り下がらせている。段々と頭の回転が熱エネルギーを生み出し始めそうなほど高速回転し、メモリを食う「京都旅行の理由の検索」というタスクの処理に全力を傾注し始めた私にとってその波が雑音という言葉を以てして形容して差し支えないものになったとき、私は二人に別れを告げて席を立った。飲み残したコーヒーを片付けようとカップを握った時にすっかり冷めきっていることに気づいた。

私の脳は結局そのタスクを完遂できなかった上にそのタスクが完遂可能か不可能かという結論を出すのにおおよそ6時間ほどを要求した。その間私の脳は他のタスク、例えば聴覚視覚などを完全に無視したために喫茶店から家までの僅か徒歩10分程度の家路で二回ほど車と自転車に轢かれかけた。そんな状況であるから考え続けるよりも行ってしまったほうが早いのではないか、答えは京都にあるのかもしれない。と、「京都旅行の目的」を「京都旅行の目的に探し」と設定することによって妥協して、案ずるより産むが易しの精神をもってして考えることをやめた。

私のもう一つの座右の銘は「思い立ったが吉日」である。翌日になり気づいたときには既に新幹線に乗り込んでいた。持ち物はスマートフォンと財布のみで手ぶらの私が旅行をしているとは誰も思わないであろう。自分の二番目の座右の銘に苦笑しつつスマートフォンを開いて電子新聞を読んでいると、ページの片隅に「仏滅」の文字を見つけて笑ってしまった、と同時に喫茶店の時同様周囲からの奇異の目を感じて、コーヒーの代わりに画面を目から離さないことによって羞恥を抑えた。

散々自分の脳のスペックを扱き下ろしてきたが、意外にも数年前の修学旅行の際の光景と目の前の光景が合致していて大変驚いている。京都駅周辺を散策しながら数年前を懐古しつつも、何故そこまで悪くない脳を持っているのなら京都へ来たがった理由はわからなかったのかとまた一つ疑問を抱えることとなった。

散策の途中で数年前の修学旅行の際入店した喫茶店を発見した。何かこの旅の目的探しのヒントになるかもしれないと思い、入店することにした。暖簾と自動ドアという組み合わせに少し違和感を抱きながら、数年前の修学旅行で起こった何かが自分を京都に駆り立てているのか、と一つ突破口を見つけることができた。が、修学旅行で何をやったのかの言われれば同じ班の連中とゲームセンターなどで遊んだため京都駅周辺の域を逸脱することなく寺社仏閣を見ることもなく一日中遊んだ、としか答えられない。それについて後悔もしてないためそれがこの旅の動機に成りうる可能性はとても低い。そうこうしているうちに席に着く。隣を見ると高校生らしき女子三人が三人とも抹茶パフェを食べながら高い声で騒いでいる。私は彼女たちの声や態度ではなく抹茶パフェに顔を顰めた。数年前の修学旅行の際にも私はこのメニューに嫌悪を感じて忌避したのであった。もともとパフェというのは「完全」という意味があるのだからそこに余計なことはしなくていいのだし、和と洋の融合と言えば

聞こえはいいが、美味しいものと美味しいものを混ぜたからといって結果が美味しいとは限らないように何かを混ぜる必要などないのである。それ自体で完結しているものにそれ以上何を加えろというのだろうか。でもやはり抹茶パフェは修学旅行生に人気らしく、普通のパフェを頼む方がこの京都ではマイノリティなのだ。確か数年前にパフェを頼んだ時も店員が未知の生物を見るような目をしながら少しの間体内時計を停止させていた記憶がある。そして、今回も眼前には目を見開いた店員、周囲には私に常識が無いのではないかと疑うっているのであろう一般客たちが。

パフェを食べ終えた後は「京都旅行の目的」への興味が薄れていき、最終的に残ったのは「帰りたい」ただそれだけであった。客観的に見れば馬鹿にならない交通費をかけてパフェ一つを食べた、それだけのことではある。しかし、帰宅してから「何故京都へ行きたかった」ふと気がついた。その時はその爽快感が声になったであろうことは言うまでもない。

京都



村島　康平

宇都宮線黒磯行きの電車を降りた。僕の後ろを、電車が音を立てながら過ぎてゆく。

一番後ろの車両から降りた僕は、電車の後姿を眺めながらホームを歩いていた。薄暗いホームを「やいた」と書かれた駅名表示板が照らしている。

改札口には人の群れができていた。いつもと変わらぬ光景だ。「やつら」に見せてやりたいよ、と思う。そばにいた女子高校生が怪訝な目をこちらに向ける。どうやら僕は独り言を言ってしまったらしい。

四台の自動改札はせわしなく人々を吐き出していた。僕もSuicaをかざして改札を抜ける。ピッ、という音が出る。だが、その音は次の音に掻き消され、その音もまた次の音の中に消える。機械音は鳴りやむことを知らない。

「やつら」に見せてやりたいよ。今度は口を閉じるのを確認してから、心の中で言った。

駅舎を出ると、ロータリーがある。ロータリーといってもタクシーが二台とバスが数台あるだけの小さなものだ。宇都宮駅のことを考えれば、確かにこれはロータリーという名を冠する資格はないかもしれない。

ふん、何が宇都宮だ。

髪を七三分けに固めた、いかにもエリートサラリーマンと見える男性が、まるで汚物でも眺めるような目で僕を見た。また僕は独り言を言っていたようだ。思ったことがすぐに口から出てきてしまう。

ぎゅっと口を結んで、僕は再び思考の世界に入る。

確かにひどいロータリーだ。バスが停まっていないことも珍しくはない。タクシーだってただそこにいるだけで、仕事の見込みは全くなさそうだった。運転手のおじさんが暇を持て余して煙草をぷかぷかふかしている。

それでも、と僕は思う。もっとひどく田舎じみているところを、僕は知っている。まともなロータリーどころか自動改札すらない駅だってあるのだ。片岡駅に蒲須坂駅、僕の記憶が正しければ、野崎駅にも自動改札はない。もっと言ってしまえば、駅のない町だってある。隣の塩谷町には、そもそも鉄道が通っていない。

……いや、もうやめよう。どんぐりの背比べと言われたらそれまでなのだ。

ロータリーの横を抜け、駅前通りに出る。道の向こうに、個人経営の小さな本屋がある。ちょっと覗いていこうかと思った

が、やめた。財布の中を考えれば当然だった。

そのまま道に沿って歩く。途中で道は大きなカーブを描き、西に向かう。ほとんど沈みかけの太陽が目の前に現れる。その太陽よりもずっと手前で赤く輝いているものがあった。信号である。そこは交差点で、何台かの車が停まっていた。

交差点にその二つの店はある。

亀田屋と信鶴堂。

道を挟んで、鶴と亀が対峙しているのだ。しかも、両店ともに和菓子屋である。

そして、何より不思議なのは、この二つの店の経営がうまくいっていることである。「未開の地」と揶揄されてしまうこの矢板という町に、それほどたくさんの客がいるとは到底思えない。しかし、この両店がつぶれるという噂さえ耳にしたことはなかった。

ただ、亀田屋と信鶴堂は一口に和菓子屋といっても少し趣が違う。新商品を開発して若い世代にも売り込もうとするのが亀田屋なら、一方の信鶴堂は手作りにこだわり、従来の商品のさらなる向上をはかる。そのため、両店の看板商品はまったく異なるものだった。亀田屋は自社オリジナルのかりんとう饅頭だし、信鶴堂は和菓子の王道、かしわ餅だ。

僕はまず、左手に見える亀田屋を目指した。

ネオンサインが煌々と光っている。新商品を宣伝する文字が右から左へ流れていく。

「ほっぺも落ちる！！　いちご大福！！！」

自動ドアをくぐって、店内に入ると、柔らかな照明が僕をつつむ。棚に並んだお菓子たちが幻想的に見える。

奥からこの店の主人が出てきて、さわやかに「いらっしゃいませ」と言った。もちろん、笑顔を添えるのも忘れていなかった。

こんな感じの俳優っていそうだな、と僕は思った。この人がドラマや映画に出ていても不思議ではない。むしろ和菓子屋の主人より似合っている。でも、和菓子屋の主人が不釣り合いなわけではない。こういう人は大抵、何をやらせても似合うのだ。決め台詞を吐こうが生地をこねようが、とにかく様になる。実際、彼が女を抱いている姿も、新商品の開発に試行錯誤している様子も、容易に想像できた。

主人はまだ視線をこちらに向けたままだった。いけない、また口に出てしまったかもしれない。僕はとっさに商品名をつぶやいてごまかした。

結局僕は、店の入り口の正面にずでんと居座っているかりんとう饅頭を買った。迷った時はこれに限る。

レジで会計を済ませると、彼はまた笑みを浮かべながら言っ

た。

「ごひいきに！」

常々思うのだが、「イイオトコ」には二種類ある。同性に嫌われるタイプと、好かれるタイプだ。亀田屋の主人は間違いなく後者だろう。

亀田屋を出た僕は、目の前の横断歩道を渡って、反対側の信鶴堂に向かった。先ほどまで見えていた太陽は、もうほとんど姿を隠していた。あたりが暗くなりつつあるなか、僕は信鶴堂の手動ドアを押した。

亀田屋の後に立ち寄ったせいかもしれないが、信鶴堂の店内はやけに暗く感じられた。しかしその暗さは決して不潔なものではなく、優しく肌にまとわりついてくるような暗さだった。隠れた名店とはかくあるべし、と主張しているかのようだった。

「いらっしゃい」

いかにも職人らしいたたずまいをした老人が、無愛想に言った。無愛想なところがまたいい。

店内に目をやる。定番の和菓子しか並んでいないうえ、並べ方にも工夫がない。そのために客は商品の一つ一つと向き合わざるを得ない。すると和菓子たちが語りかけてくる。それは、見た目や味をも超越したメッセージだ。そしてそのメッセージを客が受け取って顔を上げたとき、腕を組んだ店主の老人の、いかにも頑迷そうな顔が、わずかばかりしたり顔に変わる。それがまたいい。

僕はかしわ餅を手に取った。そのとき、舌打ちの音が聞こえたような気がした。きっと気のせいなのだが、僕にはそう思うことができず、あわててかしわ餅を元に戻した。お菓子からのメッセージは、手で触れて受け取るものではない。感じるものなのだ。

僕はふと、ブルース・リーの「Don't think. Feel.」という台詞を、店主の老人が言っている場面を想像し、こらえきれずに吹き出してしまった。今度は本当に舌打ちが聞こえてきた。

僕の目の前に無造作に並べられたかしわ餅は、この店の主力商品である。ただでさえ少ない商品の大部分を、かしわ餅が占めている。この店がかしわ餅の専門店だと勘違いしている人がいても不思議ではない。

僕はかしわ餅を一つ手に取って、レジに向かう。

「百二十円」

僕はぴったり百円玉一枚と十円玉二枚を出して、足早に店を去る。この店も、そして店主もすごく渋い感じで、僕は大好きなのだけれど、長居はしないことにしている。というより、できない。お菓子との出会いを終え、店にいる必要のなくなった

人間には、無言の圧力がかかってくる。店主の圧力である。早く帰って味が落ちる前に食え、というような視線でこちらを見る、もとい睨む。

つぶれない程度にかしわ餅を握りながら、僕はすぐにこの店を逃げるように去った。しかし不思議と心は幸せを感じていた。広い世界の中で幸せな逃亡を味わえるのはこの店だけかもしれない。

電車内での中途半端な睡眠は、かえって眠気を招くものだ。目をこすりながら、僕は駅を出て家路につく。

大きなカーブを描く道の先に、赤と黒のペンキで書かれた手作り感満載の看板がある。

「水源を守ろう

最終処理場建設は断固拒否！！

――反対同盟――」

僕はどうせここを去る。ここを出て進学し、就職する。僕の未来はこの地にない。

それでも、と僕は思う。誰にとっても故郷はただ一つしかない絶対的なものだ。そして僕の場合、それはこの矢板という町なのだ。

自分の故郷が汚されていく。水源が汚れる。風評被害も出る。そういう施設が必要なことはわかる。あの大震災で出た瓦礫を、みんなで協力して処分しようという姿勢は理解できる。

けれども、自分にとっての絶対的な地を、滅茶苦茶にされたくはない。それは誰もがもっている感情で、だから原発反対だとか地域主権だとかが絶えず叫ばれるわけだ。

このお手製の看板にはそんな思いが込められているように見えた。「反対同盟」という赤いペンキの文字は、矢板市民の血なのではないか、と僕は思った。

「やつら」によると、僕は「ヤイタ民」という農耕種族らしい。

おとなしく畑でも耕してますよ、と言わんばかりに僕は学校をあとにして電車に乗った。

矢板駅に着き、駅前の道を歩いてゆく。頬を打つ風がほんの少し寒くなり始めていた。

僕は久しぶりに亀田屋を訪れた。落ち込んだ時は亀のほうに限る。傷心を癒してくれるのはかりんとう饅頭だけである。

「いらっしゃいませ」

男前の若旦那が、いつもと同様さわやかに迎えてくれる。かりんとう饅頭もいつもと変わらず僕のことを待ってくれている。

僕はそれらを二つ手に取って、店を出た。

家に着くと、自分の部屋にこもってさっそく頬張る。至福のひと時。視界がかすんだ。コンタクトレンズに汚れが付いたのかと思ったが、違った。みるみるうちにペンが、机が、カーテンがゆがんだ。饅頭をもつ手に温かい液体が一粒落ちた。成績のこと、人間関係、進路、親との確執、夢と現実のギャップ…。いろいろなことが走馬灯のように浮かんでは消え、消えては浮かぶ。

和菓子を食べて涙が出ることもあるんだと、初めて気づいた。

その日は普段と変わらない下校になるはずだった。

僕は宇都宮駅で下り方面の電車に乗り、座席がすべて埋まっているのを確認するとドアの近くに立った。リュックサックをおろして単語帳を取り出し、近づいてきたテストに備える。

集中できないせいか、僕の耳は聞きなれない声をひろった。いかん、いかん、とは思いつつ、僕の意識はだんだん単語帳から離れてゆく。

その声は間違いなく日本語ではなかった。栃木以外の方言はわからないけれど、これほど抑揚のある方言は間違いなく存在しない。そして何より、声の主たちの鼻は高く、髪は金色か茶色で（染めたものでないことは一目瞭然だ）、長い脚は組まれている。

僕は単語帳をリュックサックの中にしまって、彼らをよく見た。四人の男たちであった。二人ずつ、向かい合って座っていた。そのうちの一人はロングスカートをまとっていた。しかし筋骨隆々の彼が女装家だとは到底思えない。恐らくは、文化の違いというものなのだろう。

彼らの会話に耳を澄ませると、その言語が英語だとわかった。僕の乏しい英語力では、話の内容まではわからなかったけれど、少なくともそれが英語であることくらいはわかった。

彼らはお世辞にもおとなしいとは言えなかった。声のボリュームはいささか大きすぎるうえ、ジェスチャーは隣の乗客に迷惑をかけているようにさえ見えた。

しかし、彼らには悪気がないようにも思えた。もしかすると、外国では「電車の中では静かにしなくてもよい」という考え方

があるのかもしれない。それも一種の文化である以上、我々にそれを否定する権利はないのだ。

郷に入っては郷に従え、とはいうものの、あいにく注意する勇気を持ち合わせていなかった僕は、ただ彼らの会話に耳を傾けていた。もちろんそのほとんどは僕には理解できなかったけれど、知っている単語が出てくるとうれしくなった。

電車が駅に停まるたびに、彼らはいちいち駅名を読み上げた。

O,ka,mo,to……Ho,u,sya,ku,ji……

会話を聞く限り、彼らの目的地はどうやら「ナスシオバラ」らしい。彼らは地図を取り出して、通過した駅を確認しているようだった。

氏家駅を過ぎたあたりで日が落ちた。最近日の入りが早い。もう冬はすぐそこまで来ている。電車の暖房もめいっぱい唸って、暖かい空気を吐き出していた。

蒲須坂駅と片岡駅では、外国人四人組は目をそばだてながら駅名を読み上げていた。あたりはもう暗くなっていた。もともと乗客が少ない宇都宮線下り方面の中でも、特にこの二駅は深刻だった。明かりの少なさがそれを物語っている。

片岡駅を過ぎて、ついに立っているのは僕だけになった。座席は少し空いているが、座る気になれなかった。人に密着するのは、怖い。

どうせまもなく着く。僕は外に目をやった。しばらくの間は田んぼしか見えない。ぽつんと立っている送電線、遠くに見える街の明かり。駅に近づくに連れて、ようやく景色が変わってくる。オープンしたてのスーパーマーケット、目障りなパチンコ店、明かりが灯りはじめたマンション……。

電車が駅に滑り込む。ホームでは高校生たちがたむろしていた。一応、矢板市内には高校が三つある。

「What station is this?」

スカートの外国人が言う。

向かいにいるもう一人の外国人が、くるりと体の向きを変えて駅名を読んだ。「Mm,Ya,i,ta…」

スカートの外国人は言った。

「Oh, Yaita is a big city.」

途中の駅で乗車してくる客が少ない宇都宮線下り方面だ。そんな中これだけの人がホームで待っている。それは矢板に三つの高校があって、単に今それらの下校時間にあたっているだけなのだが、そんな事情を知らない彼らからすれば「big city」に見えても不思議ではない。

偶然の big city。

僕は電車を降りた。心の中で「So,Yaita is a big city.」と言いながら。

改札を抜け、駅舎を出る。ロータリーが、駅前の道が、お手製の看板が、そして亀田屋と信鶴堂が、僕を出迎えてくれる。

ここが僕の帰る場所だ。

ここが僕にとっての「big city」だ。

僕は亀田屋と信鶴堂で、それぞれかりんとう饅頭とかしわ餅を買った。

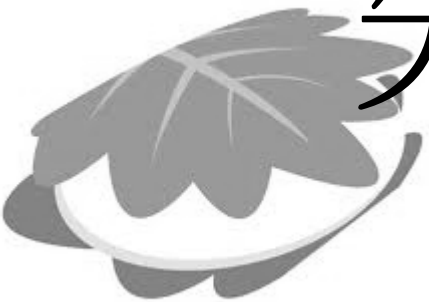
心を癒してくれるかりんとう饅頭も、職人の技を感じさせるかしわ餅も、僕は両方大好きなのだ。そして、この街のことも。

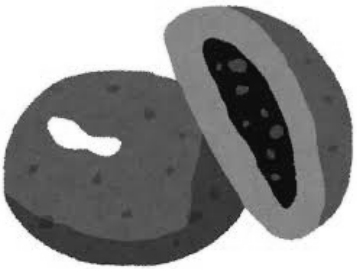
和菓子を両手に握り、交差点で信号待ちをしながら、思った。

僕の心はずっとこの地にある。たとえいつかここを去る日が来たとしても。

信号が青になる。和菓子を持った両手を規則正しく振って、僕は歩き出す。家まではあと少しだ。

矢板





一二三　哲也
詩　十二編
P35～40

汐織　郷馬
散文　一編
P46～47

片桐　修
散文　二編　詩　一編
P41～45

自由制作

青い樹

世界は土なのです
私達は樹なのです
土から知識を得て
養分を成長する力に変え
根を伸ばすのです
養分はそのままではなりません
力に変えねばなりません
食した知識は知恵と変え
己を大きくするのです

グーンと大きくなるまでは
花には力を入れないのです
まだ 青葉で十二分
蓄え続けるのです
時が来れば分かります

その時に花を咲かせましょう
後咲く花へと想いを馳せて
今は真っ直ぐ根を伸ばしましょう

会釈

返してくれると
私は嬉しくなる
何故だろう？

ああ、そうか
この感情が
私の人間なのだ

嫌いですか

私を真っ直ぐ見つめると
私を指差しこう言った
私はあなたが嫌いです

彼を真っ直ぐ見つめると
彼を指差しこう言った
私はあなたが嫌いです

そして私は、あなたへ問います
あなたは彼が嫌いですか
あなたは私が嫌いですか

黒雲

何かが迫ってくる
怖い、怖い
何かに憑かれている
怖い、怖い
足を動かせ、足を
怖い！怖い！
振り向くな、考えるな
怖い……

耳鳴りが、耳鳴りがぁ
キーン！キーーン！

臭くて何が悪いんだ
臭ったって構わんじゃないか
妙に飾った化粧よりも
何十倍も魅力が有るさ
これを個性と云うんだよ
これを自然と云うんだよ
不変と変化の調和の中でも
黄色いイチョウは吹いてるよ

流れる星の流れた数だけ
私の夢は消えてゆく
もしや、私の願いとは
あの流れ星になることか

漠然とした安堵と不安
下りる駅はまだ先に
会話なく、揺られる……
これから明日に戻るのか
肩の荷物を背負い直す
都会の街よ、さようなら

生命の神秘とは何ですか
自然の神秘とは何ですか
文学の神秘とは何ですか
全く関係がない様でも
私にとっては欠かせないのです

彼らの心の奥底にはね
不意にもそれ等が見えるのです
彼らの心の奥底にはね
私の知らない神秘が有るのです

人は、不明確な何かに近づくと
それを、不鮮明に表現するのです
感情であり
具体化されたものであり
訴えている様に見えるものであり
人の操る伝達手段であります
これに触れた私には
新たな神秘が見えるのです
私は誰かに伝えたく
私はこれを書くのです

絶望を感じるとは
必ずしも死を感じることにはない
異形を受け入れられず
心を忘れることにある
孤独という悲しみの中から
人は何かを感じとる
感じとるは容易いけれども
救い上げるのは出来ないか

記憶の空はもう遠い
あの場所に座る面影だけが
今の僕の、心の底に
印象のみを色濃く残す

まるで、合わない歯車の様に
二つの世界が重ならなくて
そこに在るのかはっきりせずに
虚ろな夢を見ている様で

光が溢れる昼下がりの窓際に
涼しく佇む純(すなお)な微笑み
遠い空を眺めては
僕は、泣くしか出来なくて

太陽の熱は感じても
太陽の光は感じない
無から有は生れない
私は有を作れない
私が世界を作るには
私が世界を知らねばならない
どれだけ視点を変えようと
どれだけ場所を移そうと
私は光を見られない
私には、それらが見えない
私は世界を見抜けない
私は未だに、有を作れない

篠笛

自由とは、こう云う事なのだな
全てが表現できる訳ではなく
それで不満が生れる訳ではなく
満ちているのだ
まるで表情豊かな太陽の様に
まるで心を鎮める雲の様に
正直に、穏やかに、飾らない
素朴と云う言葉は
この為にあるのだろうか
響く音色に飽きが来るなら
彼はきっと、自由でないのだ
純粋になれ
笛の音は、創るものなのだ

暑い。まだ五月も半ばというのに、ヒートアイランド現象の中心とも言える東京都内の中野ではとにかく暑い日が続く。暑さは沖縄にでも追いやって欲しい。これでお熱い（笑）カップルのひとつやふたつ見せられればドラえもんにすがって地球破壊爆弾を出してもらうほどである。もしくはアトムかマジンガーZを爆破する、リア充は消毒だ！

「春樹、ぼやいてる暇あったら磨け！終わらねえだろ！」

今の俺を太陽以上に熱く焼くのが、となりでデッキブラシを振るう同輩、蘭紅葉である。赤銅の髪をウルフヘアにして、目はルビーの如き光を湛える、秋を思わせる名前と裏腹に熱い人間だ。テニスやればウィンブルドン行けるんじゃねえの？……それは松岡修造か。

俺、雪路航が所属する私立明神大学中野高校生徒会役員は、五月中旬のファッキンホット（クソ暑い）な日にプール掃除に駆り出されていた。

「ほらー。早く終わらせないと日焼けするぞー。日焼けは火傷だぞー、ガンにもつながるからなー。」

プールサイド、パラソルの下という六本木ヒルズ最上階よりも現状では価値のある位置にいる生徒会長（認めたくないが）一ノ宮先輩が声をかけてくる。あんたが仕事すれば早く終わるんじゃねえの……。

「ふんっ！仕事しろやっ！」

「ぶげらっ！」

紅葉の投げたたわしが会長に綺麗にヒット、彼の顔面には痛々しい跡が残っていた……自業自得だな。

一時間後、無事に作業も終わった。俺と会長は途中体育着姿のために透けた女性役員陣の下着を凝視し前かがみになる事態も発生したがなんとか午後3時を少し回ったところで掃除、水入れが完了した。

「暑……航、帰りにギャリギャリくん奢れ」

先輩役員を目の先に見ながら一年生二人でプールサイドを並んで歩く。ここでプール側を取るあたり俺気遣い出来ると思うのだが……なぜモテない……。お前らがみんな悪いのか……。

「嫌だっての。なんでお前の分までギャリギャリくんを……」

「キスするって言ったら？」

俺が聞きとったことを理解する間も無く、彼女は俺の体をドン、と押し、陽光を反射し煌めく水中へと落とした。そのまま紅葉も水中へ飛び込む。

水を入れたばかりだからだろうか、掃除が行き届いているからなのだろうか。澄み切った水の世界で、彼女は上から俺に体を預けてくる。……日頃がさつ、熱い奴と言ってはいるがやはり女子、といったところか滑らかな四肢が俺の手足と触れ合う。

四肢、胴と続き、最後に唇が重なった。ファーストキスが水中とかどこの青春ラブコメだよ……と思いながら、彼女に身を任せた。

ソーダ水のように泡が立ち上る、音のない世界で二人、クラゲのように水に揺られ、一瞬とも永遠とも感じる時を過ごした。

豪快に水温を響かせて紅葉がプールから上がり、俺の手を引く。

「おい、お前今」

「ちゃんと約束、守れよ！」

俺の言葉を待たずにそう言って、手を引きながら走っていく紅葉。

心を水の中に置き去りにされ、俺はただ、その後ろ姿に惹かれるしかなかった。

罰ゲームの真意

せわしなく指が動く。ボタンを叩き、レバーを動かす。それに合わせて、四角い画面の向こうの戦士が隆々とした四肢をぶつけ合う。

「む……腕を上げたな。」

「いやいや、バーチャになると椿には勝てないって。」

背筋も凍る……それは階段の形容だ。ともかく、十二月下旬の恐ろしく寒いある日、山手線を横断する中央線の某駅から徒歩数分の僕の自宅であるアパートの一室、僕児康太は幼馴染の槇島椿と二人で、往年の名作格闘ゲームに興じていた。同じ大学の同じ学部に通う二年生である。あと十分ほどで友人二人もここに合流し、四人でプレイをする予定だ。

二人で遊んでいるゲームは最も格ゲーに向いていると友人の佐藤が言っていた名機、セガサターンのソフト「エックスメンVS. ストリートファイター」だ。エックスメンとストリートファイター。日米で爆発的な売上を誇ったシリーズの夢の共演作で、エックスメンとストリートファイターから1キャラクターずつ選んで戦うのが特長だ。さすがに同時操作はできないが多数のキャラが入り乱れる光景は感動の一言に尽きる。さすがに本来のセガサターンのメモリの限界を超えてしまうのでそこは

SEGA の名物「足りないなら足せばいい」理論を用いて開発された4M 拡張 RAM を端子に挿すことで問題なくプレイが出来る。さすが世界の SEGA である。

僕の隣の椿、外見は至って普通の少女である。冷静な性格を体現するが如く目と髪は黒曜石のような黒を湛え、口調も中性的だ。しかし周りが軽く引くほどのゲーマーで、今日まで椿と友人関係を保っていられたのは僕と合流予定の二人の三人だけ。ゲーマーというだけあってその腕は確かなもので、SEGA のゲームをやらせれば並び立つものはひとりいるかいないかというレベルだ。

「よし、次は罰ゲームをつけよう。負けたほうがかった方の言うことをなんでも聞くでどうだ。」

「ちょっと待った。それ椿が有利すぎない？」

「そんなことはない。SEGA でない以上可能性は五分五分だ。」

「えー……」

「異論は試合後に認める。ほら、キャラを選んで。」

負けたら最後、年末に控える有明での祭典や正月にわたり僕の財布の搾取にかかってくるだろう。絶対に負けられない。

一分後、ゲームの結果が出た。結果だけを伝えるなら僕の負け、惨敗もいいところだ。

椿が本気を出さんとばかりにコントローラーを先程まで使用していたアーケード仕様のレバーとボタンに変えて、セガサターン専用ゲームパッドを持ち出したのだ。そうなれば鬼に金棒ジョジョに波紋。円堂守にゴッドキャッチである。要は無敵という意味だ。

「さぁ、罰ゲームか。何にしようか……」

いや、焦らしても分かるって、どうせ僕の財布をカラに……

「年末年始、ずっと康太の部屋にいるからな。」

「はいはい……は？」

「押しかけ妻みたいで面白そうだな。一日中康太とゲームをやるんだ。遊びに行っもいいな、いろいろと行きたいところがあるんだ。」

「は、はぁ……」

予想外の命令で驚いている僕を尻目に、これからの予定を立てる椿。遊びに行く、金を使う。はい、搾取ルート決定です。

「とりあえず明日はらぼーとに行こうか。」

と、千葉県は船橋にある商業施設を挙げる椿。搾取ツアーの第一弾としてはまずまずな所だろう（僕の財布を絞るのには）

椿がひとりごちていると、玄関のチャイムが鳴る。出ればカップルが一組。

「メリクリ！イブ！」

「よ、適当に買ってきたぞ。」
僕と椿共通の友達、朝霞桜花と仁科良だ、桜花の方は自慢の驚異の胸囲（洒落ではない……いや、使えるなこれ）を強調するようなサンタの衣装、
「超恥ずかしかった……」
とうなだれる良はグリーンのモッズコートにブーツ。確かに桜花といると恥ずかしいだろう。手に提げられているビニールの中にはワイン、そして食料、これからの長い夜にはぴったりだ。
今日は１２月２４日。クリスマスイブだ。明日は桜花と良がデートに行くらしいので今日四人でパーティーを行うことにしていた。
二人を案内して椿の元に戻る。
明日の予定……買い物、年末年始一緒……
「ないない」
「どうかしたか？」
「なんでもない」
こちらを振り返る椿に返答をして、テーブルの上に良が買ってきたワインやチーズ、チキンなどの食品各種、そして僕がバイト先の喫茶店のマスターにアイデアと名前をもらったケーキ
「クリスマスが今年もやってくる！喰らえ！進撃のクリスマスケーキ！！！」と流行りにあやかりにあやかった上感嘆符が第一次世界大戦前後のドイツ宜しくインフレした名前のものを乗せる。
椿を呼び、四人でテーブルを囲む。桜花が皆にクラッカーを渡し、音頭を取る。
「メリークリスマス！」
「イブだろ」
「イブだね」
「イブだな」
「そこは別にいいじゃん！」
四人で笑いながら、思い思いに食べ物へ手を伸ばす。
幸せ味だ。

アザレア

小さな部屋に僕は一人
小さな部屋にアザレアが一輪
僕はアザレアが好きだ
アザレアは何も思わない
僕はアザレアを愛する
アザレアは僕に愛される
アザレアは何も思わない
僕は何も思われない

小さな部屋に僕は一人
小さな部屋にアザレアが一輪
アザレアの喜びを、僕は知らない

ユー アー スィーン

なるほど、SNSで話の枕詞に「ハンバーガーチェーンで女子高生が――」と付く理由はこれだったのか。

「でさー、そのアイリがね――」

「うわーマジでー？　アイリ超うぜーな」

盗み聞くつもりなど無くても自然と会話が聞こえてくるほどにヤツらの声は大きい。周りの迷惑など御構い無しである。特に私のように神経質のきらいがある人間にとってはなおさらだ。これならば数百円我慢してカフェ系統の店に入るべきだったと後悔する。

「それでーアイリのヤツなんて言ったと思うー？」

「えー何々ぃー？」

キャハハ、と下品な笑い声が店内に響き渡る。しかしこの陰口を言われているアイリという子も不憫だなとすこしばかり同情の気持ちが沸いてくる。まだ見ぬ本人の名誉のために内容は伏せるが、この大声によってハンバーガーチェーン内の多くの客に結構なプライベートを公開されてしまっているのだから。高度に情報化されたこの現代において、プライベートの漏洩はなんとしても防ぎたい命題であろうに。このプライベートの撒布すら今どきの女子高生の敵対行動だとしたら空恐ろしいものがある。

「あーそうそう、あの質問にイェスノーで答えて人物を当てるアプリあったじゃん？」

「うん。あたしは入れてないけど。スマホでお金使うとママが怒るんだよねー」

「あはは、なにそれー」

「まぁまぁ。で、話戻すけどそれのパクリがタダで落とせるっぽいよ。ふつーに当たるし」

「えー？　どれどれぇ？」

ふむ、騒音の中にも使える情報があるとはこういうことなのだろうか。私はスマートフォンを愛用しているが、アプリは有償では使用しない性質である。それ故に興味が引かれるようなアプリでも有償・無償の壁により泣く泣くインストールを諦めたものが多々あるといっていい。今しがた耳に飛び込んできた情報も、カネの壁に阻まれ私が手に出来なかったものに関する話題のようだった。

フリック入力よりも多少小さくともキーボードを使うのが、私の流儀である。そんなことはどうでもよい、テキトウにキーワードを打ち込み、お目当てのものが掛かるかを楽しみにする。出先だからだろうか、少々読み込みが遅いようだった。

情報化社会は便利なもので、テキトウに打ち込んだ拙いキー

ワードでも、知りたかった情報が検索のトップに来てくれる。複数の記事とレビューを参照しパクリながらも大して問題が無いことを確かめて、いざインストール。いつもより遅めの読み込みがもどかしい。

「あれ？　なんかオジさんイケメンじゃん」

「ほんとだー。マジうけー」

アプリを起動したのはいいが、事前情報と実情が少しばかり異なっていた。先ほど見た記事は新しいといって良いものであったが、どうやらこのアプリ、それよりも最近にアップデートをしたようだった。表示されるバージョンはより大きな数字を示してあり、質問をしてくる腑抜けたような表情をしている中年男性は、引き締まった肉体を持つ精悍な褐色の男に変わっていた。

まぁ、特に性能の面では問題ないだろう。そう思い、小手調べに各国の首脳を思い浮かべて質問に答えていく。

『あなたが思い浮かべたのは、――――ですね』

これは全く問題ない。次は、と呼んでいる小説の登場人物を正解として男に応じる。

『……あなたが思い浮かべたのは、――――ですね』

おお、これも中々素早く的中させた。出版されて間もない本であったはずだが、インターネットは凄まじいものだ。

その後も何度かマイナーな人や物にで対決を挑むも、この黒人は相当博識なようで、すぐに当てられてしまった。さてどうしようか、この気障な男をアッと言わせるには、と考えていると、一つ案が浮かんだ。あまり褒められるものではなかったが。

先ほどから否が応でも聞かされていた可愛そうな女の子のプライベートを参照に、選択肢をタップする。これならどうだ、とほくそ笑んだ。

『……あなたが思い浮かべたのは、〇〇アイリですね』

映し出された写真は、騒音発生器たちと同じ制服に身を包んだ地味な女の子だった。

「え……？」

呆然としたのか、指が画面を触れてしまったらしい。ネット百科事典のようなページに飛んだ。そのページは、そのアイリという子の情報で、埋め尽くされていた。

わけが分からなかった。誰に命じられるわけでもなく、私はある人物を思い浮かべ、男の質問を肯定し、続ける。

『あなたが思い浮かべたのは、――――ですね』

写真をタップし、百科事典形式のページを開く。乱雑にスクロールをし、内容を流し読む。

そのページに書かれていたのは、紛れも無く、私だった。

後書き

鬼無里　悠夜

どうも鬼無里と言います。今回は今まで書いてきた物語とは違い明るめのラブストーリーを書いてみました。……駄文ですが。この話を書くために宇都宮駅から東武宇都宮駅までを三回ほど往復しましたが、改めて文にして書いてみるとほとんど宇都宮の特徴を表せていなかったかなと思います。

それにしても、甘い物語ですね。作者なのに思わず砂糖を吐きそうになりました。

編集をしてくれた部長、並びにここまで読んでくださった読者の皆様に最大の感謝です。

お粗末さまでした。

追伸、リア充は末永く爆発しろ！！

あとがき

坂巻　蝸牛

いやあ。このテーマは本当にキツかった。なにがきついって、アイディアが出ない。短くまとめることになりましたが、とにかくドタバタがやりたかったです

あとがき

０６

考えながら歩いて転ばない程度に主人公の旅の目的を考えて当ててみてください。

あとがき

片桐　修

初めましての方は始めまして。前にご覧になったことがある方、ちーっす。自称ラノベ作家、別名チンパンジーが打ったタイプライターの方がまだいい文章が出てくる作家、片桐修です。今回は四作の投稿となりました。小説の方は全作世界観が繋がっています。舞台はだいたい中野、中央線沿線で全て完結しています。明神大学のモデルは明治大学、大学生四人はそこの中野キャンパスに通っています。学部は二つなので1：3で分けました。桜花、椿、康太が文系、良が理系とだけ言っておきます。

もう一作の紅葉、航が通う高校は本来は男子校ですが明神大学中野高校は共学です。

さらにいらないキャラ説明をすると紅葉はジョジョの奇妙な冒険が大好きで座右の銘が「人間讃歌」です。いらない情報ですねはい。

今作で文芸部の部誌には一年間作品を載せたことになりますがやっとラブコメをかけた。という思いしかないですね。スカウトされた当初からラブコメを書こうラノベを書こうと思っていたら純愛ホラー詩にＢエ・・・エフンエフンエフン。あとスラップスティック作品と、ラブコメのラブとコメは出ても一切組み合わさることのなかったラブちゃんとコメくんもやっとコンビを組めました。これで「実は桜花と椿と紅葉はみんな邪神です」とでも言えばラヴ（クラフト）コメディ三編になりますね。

狂気あふれるスプラッタに早変わり、文章って怖い。

近況をば、え、いらないって？そんなこと言わずに、いらない知識とかつきますよ。三行でまとめるんで。

レイヤーデビュー

某関西アイドルのライブに行く

片桐、京都に立つ

メール職人として独り立ち

・・・四行でしたね、てへ★

十一月下旬、明神大学サークル棟で愛すべきSEGAのゲームに興じながら

あとがき

皆さん、こんにちは。汐織郷馬です。この度は私どもの作品をご覧になってくださり、ありがとうございます。

今回の表現は「地名＋お菓子」ということで、帰省のためによく訪れる新大阪駅を基点とした、関西の諸地域と、私的全国土産物ランキングのトップ３に入る赤福さんをテーマとさせてもらいました。実を言うと京都は数えるほどしか行っていませんし、広島というよりも香川より西には足を踏み入れた経験は、恥ずかしながらありません。他の部員は結構綿密に取材をしているようなので、とても心が痛いです。しかしそれ故でしょうか？　書いている内に探索旅行に対して凄い憧れが生まれてきました。自己投影はなるべく避けるべきとは思っていたのですが、後を気にせずに知らない地域をふらふらしたい欲求が知らず知らずに私の中に眠っていたようであります。後は所謂、中二病の再発症でしょうか？　第一次の下書き、もっと言えば構想の段階からその片鱗はあったのですが、ここは敢えて貫き通す！　とわけのわからない決心をした結果、あんな作品が生まれてしまいましたとさ。え？　いつもあんな感じですって？

自由制作のほうは時事ネタを存分に盛り込んだ冬のホラーになっております。例のニュースを見た段階から思い浮かんでいた案なのですが、我が宇高で起こったちょっとしたトラブルを（事情がほとんど分からないまま）知って、これは書くしかない！　とこれまた変な決心とともに書き上げた作品です。

後は、私の宇高文芸部誌の作品に毎回登場していた小谷さんがついに登場しなかったことの報告でも。あ、興味ないと。申し訳ないです。

どうも、お目汚しすみませんでした。

汐織　郷馬

後書き

一二三　哲也

皆さん、今日はいいお天気ですか?:D の意味が筆名だと最近知った一二三哲也です。ついでにその:D を変えようかにわか悩み出しております。どうしよっかな。

さて、早速ですが、私は皆さんに謝らねばならない事があります。

今回の宇高文藝誌では、各自のテーマを元にした作品群を載せております。私が載せる予定であった作品の具体的な内容ですが、日光+湯葉饅頭を題材にするつもりでした。これを書くために日光の杉並木に取材にも行きました。作品の素としては十分過ぎるネタが揃い、原稿はトントン拍子で進むはずでした。

しかしその後、筆は思うように進まず、私は、その大自然を元にした作品の原稿を期日迄に完成させることが出来なかったのです。

この文藝誌を期待してお取り頂いた皆様に、私は深くお詫びを申し上げなければなりません。

誠に、申し訳御座いませんでした。

この作品はお蔵入りとなる予定です。ですが、万が一にも暇が有れば、続きを書き、完成した作品として部誌に載せて頂きたいなと思います。まあこれからは受験生になりますし、難しいとは思いますが。

軽々しい下の文ではありましたが、これにて謝罪とさせて頂きます。

さて、これまた早速ですが、私はもう友人以外とはカラオケには行きません!何故かは聞かないで下さい。事情は前回の文藝誌の後書きにて推測が容易です。まあレパートリーがあれじゃねえ。男性の皆さん、女子高生の前で島唄は歌わないように(笑)。

まあ、あれから更に親父臭が漂ってきましてね、最近のマイブームが放課後に焼き鳥屋に寄ることなんですよ。あ、でも、焼き鳥美味しいですよ〜?皆さんも、マックとかクレープ屋とか

ばかりでなくて、是非やきとり竜鳳にも立ち寄ってみて下さいよ。（あれ、何か宣伝みたいになっとるしww）

話を変えます。この度私達宇高二年生は、研修旅行（修学旅行でない、断じて！）に行って参りました。その旅行の最終日のことなのですがね。

何と！あの北野天満宮のおみくじで大吉を引くことが出来ました！大吉ですよ、大吉！もう、うひゃーですよ！

うひゃーーーーーー！！！！！！

あれ、もう夕方ですね。そろそろ、お別れの時間のようです。時の流れはこんなに早いのですね。幼い頃は遅いなぁと感じておりましたが。歳はとりたくないものです。

夕方といえば、私の通っていた幼稚園では、帰りに「今日の日はさようなら」が流れていました。しみじみとくる名曲です。

一度、静かな夕暮れ時に、通して聞いてくださいな。今回はこの曲の紹介にて、筆を置かせて頂きます。

さ、勉強勉強！

追伸

武士道、オススメしますよ。

12/1　一二三哲也

テーマが「地名＋お菓子」だ、と聞いた僕は非常に焦りました。地名とお菓子をどのように融合するのか、どうやって一つの物語を編み出していくのか、悩ましいところでした。

そんな中で完成したのがこの作品です。「お菓子」の要素が「地名」に比べてやや弱くなってしまったような気がしています。反省です。

なお、この物語はノンフィクションの部分とフィクションの部分が混ざっています。たとえば、矢板駅周辺の描写はほとんど正確ですし、亀田屋と信鶴堂というお店が交差点をはさんで商売していたのも事実です（信鶴堂は数年前に店をたたんだため、現在では亀田屋のみが残っています）。電車に四人組の外国人が乗っていて物語中と同様の発言をしたことも、矢板市が「最終処分場」の建設予定地になったことも、現実にあったことです。

一方、フィクションの部分としては、亀田屋と信鶴堂の描写全般が挙げられます。亀田屋にあの爽やかな店主がいるのか、信鶴堂にあの頑固そうな主人がいるのか、筆者は知りません。なぜなら、筆者である僕は物語の主人公とは違って、両店に通い詰めていないからです。幼いころに数回行った程度で、最近ではまったく行っていません。

ですから、この物語は「現実に近いフィクション」なのです。

さて、その「現実に近いフィクション」を通して筆者が伝えたかったことを述べようかと思いましたが、やはりやめておきましょう。物語を読んでくださった方にはだいたい伝わったと思いますので。

編集後記

この度は宇都宮高校文芸部誌「表現９０」をお読みになってくださり、まことにありがとうございます。

さて今回で表現の発行も９０回目となるそうですが、特に「９０回記念だー」とすることはしません。実は構想の段階では、９０つまりは卒を題材に作品を作ろう！　などという計画もあったのですが、「結局は卒業一色になってつまらないのでは？」という意見があり、その企画はボツということになりましたとさ。それに代わって登場したお題が、この度の企画「地名×お菓子」でした。確かこのアイデアも宇高文芸部の個性の濁流のなかで生まれたものだったと記憶しています。旅モノが書きたい人、地域密着を提案した人、あまーい話を書こうと言った人、それぞれの意見がぶつかり混ざり合った結果が、この「地名×お菓子」となりました。

今回は５３ページと少ないと言うことを避けられない分量です。これは宇高生にとってテスト、マラソン、研修旅行と様々な行事が詰まっている魔の十一月に、メインの執筆期間が重なってしまうように予定を組んでしまった私の責任であります。読者の皆様には謝罪を、部員やその他の関係者の方には感謝をこの場を借りて申し上げたいと思います。

秋の宇高祭の段階では、文芸部のネット窓口をほとんど掌握できていないと申しましたが、あの後どうにかしてホームページの管理ができるまで漕ぎ着けることができました。依然としてメールアドレスとウェブログはまだなのですが。それに伴い、宇高文芸部のホームページが移転しております。

以前までのホームページ
http://utkwriters.iza-yoi.net/
から、
新しいホームページ
http://utkwriters.tobiiro.jp/
への移転です。

まだ旧ホームページは稼動しており検索でも上に出てきますので、お気をつけください。

それでは、この辺りでお別れとさせていただきます。

これからも宇高文芸部をよろしくもうしあげます。

平成二十五年十二月三日

宇都宮高校文芸部　編集長兼部長　尾上拳士朗

奥付

文芸部誌「表現　９０」

2013年12月3日　発行
2014年2月3日　第2版

著者　宇都宮高校文芸部員

発行者　宇都宮高校文芸部

印刷・製本　宇都宮高校文芸部

〒320-0846
栃木県宇都宮市滝の原３丁目５番７０号

Mai/To　utakawriters@gmail.com

Twittr　@utkwriters

HomePage　http://utkwriters.tobiiro.jp/
Weblog　http://utkwriters.sugo-roku.com/